

い で た か ず ひ さ

出田 和久

文化学部 客員教授
修士(文学)/京都大学

ホームページ URL

<http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~ideta/index.html>

主な研究業績

- 出田和久、2019.01:「歴史地理系データベースの構築と紹介—歴史 GIS データベースを中心に—」、『日本歴史』848号(新年特集「ICT時代の歴史学」)、吉川弘文館
- 出田和久、2018.07:「奈良盆地の条里・条坊史料と GIS 利用の可能性—「奈良盆地歴史地理データベース」を事例に—」(海老澤英典「中世荘園村落の環境歴史学」、吉川弘文館、所収)、pp.22-42
- 出田和久、2016.08:「条里地割と道路」(館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報3遺跡と技術』、吉川弘文館、所収)、pp.148-177
- 出田和久、2015.06:「飛鳥から藤原京へ—宮から京への展開」(館野和己編『日本古代のみやこを探る』勉誠出版、所収)、pp.47-72
- 出田和久、2015.05:「古代の国・郡界と郡界復原の試み—奈良盆地の諸郡を事例に—」、『奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告』、VIII、pp.49-62
- 出田和久、2015.04:「山陽道 備前」(条里制・古代都市研究会編『古代の都市と条里』、吉川弘文館、所収)、pp.267-280
- 出田和久、2015.03:「宮から京への展開と藤原京・平城京の立地環境」、『都城制研究』(奈良女子大学古代学術研究センター発行)、9(東アジア古代都城の立地条件)、pp.117-134
- 出田和久・石崎研二・宮崎美美、2014.03:「WebGIS データベースの試み—奈良盆地前方後円墳データベースを事例に—」、『古代学』(奈良女子大学古代学術研究センター)、第6号、pp.1-11
- 出田和久・南出眞助、2014.01:「佐賀城下町絵図の歪みと精度」(平井松午・安里進・渡辺誠編『近世測量絵図の GIS 分析—その地域的展開—』、古今書院、所収)、pp.239-256
- 出田和久、2013.03:「正保城絵図の地図の精度に関する予察的検討—小倉城絵図を中心として—」、『地理学報』(大阪教育大学地理学教室発行)、第37号、pp.139-150
- 出田和久、2012.06:「近世村落景観の復原—村絵図と地籍図から景観の変化を考える」、『アジア遊学』、153(海老澤英典・服部英雄・飯沼賢司編『重要文化的景観への道—エコ・サイトミュージアム田染荘』、勉誠出版、所収)、pp.113-125
- 出田和久、2012.03:「奈良盆地歴史地理データベースの構築とその利用」(HGIS 研究協議会編『歴史 GIS の地平—景観・環境・地域構造の復原に向けて—』、勉誠出版、所収)、pp.197-207
- 出田和久、2011.11:「歴史地理学における絵図資料とフィールド調査」、『月刊地球』、33-11(通巻386号)、pp.673-680
- 出田和久、2010.12:「古代における奈良盆地の開発と歴史—「土地に刻まれた歴史」を手がかりに—」、『奈良女子大学文学部 研究教育年報』、第7号、pp.23-32

研究テーマ Research theme

①古代都城の形態 ②古墳の地域性に関する地理学的研究 ③開墾助成と開墾地移住

概要 Overview

私は上記の3つを主要な研究テーマとしています。①日本の条坊都市のモデルは中国にあるとされる。条坊都市をグリッドプランの都市とみると、中国都城は外形が四角いグリッドプランの都市ということになります。グリッドプランは古代ギリシアに発するとされるが(この点に関しても実証的に再検討が必要でしょう)、その都市の外形は不整形です。一方、中国における古代都市の外形は方郭ですが、新疆ウイグル自治区などの漢代の都市遺跡をみると内部の街路はグリッドプランを示さず、都城の街路パターンがグリッドプランになる過程については必ずしも明らかではありません。そこで、四角いグリッドプランの都市の成立と伝播に関して世界的視野から再検討が必要であると考え、新たな研究視角から追究し、古代都市の国際的な比較研究を目指しています。②前方後円墳及び主要円墳・方墳に関する GIS データベースを構築し、データベースに収めた古墳の属性(墳丘の規模、埋葬主体部の構造、副葬品、周濠・埴輪等の有無など)およびそれらの組合せによるさまざまな分布図の作成を通じて、分布論的視点からいわゆる「前方後円墳体制」の実態を実証的に明らかにし、その妥当性を検証するとともに、さらに主要地域の地域相と地域性及びその変遷をダイナミックに描出し、古墳時代における各地域の個性を明らかにしようとしています。③調査時に偶然目にした移住者の日記がきっかけになり研究をはじめたものです。近代化の進展と人口増加により食糧需給関係が厳しさを増す中で、大正7(1918)年の米騒動の翌年大正8年に食糧増産政策の柱として開墾助成法が制定されました。一時期は「耕地行政の主柱として光彩を發揮した」ともされた開墾助成法による成果と実態に関する研究は極めて少ないです。同法は250万町歩とも見込まれる開墾適地の耕地化・開墾を促進し、食糧、特に米の増産を進め、「内地」における安定的な食糧供給を図ろうとしたものでしたが、結果的には十分な成果を上げることができなかったようで、研究自体非常に少ないです。開墾助成法制定100年を迎え、朝鮮半島や台湾における米生産との関連も視野に入れ、開墾助成の概要および開墾地移住の実態を明らかにすることが焦眉の急といえます。



大明宮含元殿の基壇(中国西安市: 右が楼閣、左が含元殿)



角塚古墳(岩手県奥州市: 最北端の前方後円墳)

応用分野 Application areas

古代都市史、古墳時代の考古学、日本近代農業史

共同研究等へのニーズ Need for joint research

①文化財の保存・活用に関心のある専門家や都市史の専門家との共同研究②データベースの利用に関心のある古墳研究者との共同研究③近代日本の開拓・開墾や食糧増産政策等に関心のある専門家との共同研究の機会があればと思います。